

仙花紙で作った怪しげな雑誌も、週刊誌に変わっていった。バクダンといわれた大衆酒も、いつしかトリス・ウイスキーと、しゃれた名前になったし、都会人は、ラバーソールの靴を競って履きだした。

ジュラルミンで製造した鍋・釜はすっかり姿を消した。焼け跡のバラック建ての家も、文化住宅という名の住宅に変わっていった。世の中から段々と戦争の傷跡が消えていき、「もはや、戦後ではない」という言葉が普通になってきた。

しかし、あの外地からの引揚げの苛烈な試練、苦難の引揚げ生活、無からの立ち直りの苦労は、忘れようとしても忘れられるものではない。世の中が、平和になればなるだけ、物が豊かになればなるだけ、それに反比例して、苦しかったこと、悲しかったことが思い出されてならない。

満州開拓の思い出

愛知県 古田 キミエ

私は戦争の激化した昭和十五年に、愛知県北設楽郡設楽町田口から「大陸の花嫁」として、村人に見送りを受け満州への一步を踏み出しました。まるで出征兵士のように、私が二十一才の秋でした。途中主人の家に寄り、親族をまじえて結婚式のかたちだけを取りました。主人の家で一泊した後、豊橋から汽車に乗り下関に着いたのは三日後でした。

その日のうちに釜山行きの船に乗りました。出港の汽笛と共に船が港を離れるときは、陸地が見えなくなるまで甲板に立ち、親とも別れ、これから起きることを知る由もなく、ただ涙があふれて止まりませんでした。船中に一泊して釜山に着きました。遠い外国にきたような心細さがわきました。

釜山から哈爾濱・齊齊哈爾を経由し、三日目に目的

地の太平山村三合屯開拓団に着きました。十月半ばというのに、震えるほど寒く、荒涼とした大平原の中、開拓の集落だけが遠く点在して見え、「大陸の花嫁」と歌った、希望に燃える新天地とはほど遠く思え失望していました。

家は、旧満州人の古屋で、一軒に夏目さん、稲熊さんと私たち同郷からきた三家族が入りました。草葺の屋根と泥壁の粗末なつくりでした。海老班という班を作って、共同炊事、共同農作業が始まりましたが、まだ開墾の段階で、作物はとれませんでした。

翌年の八月に夏目のおばさんの助産婦のもとで、長女由子が生まれ、皆様にかわいがってもらいました。しかしその年の十二月には、予期しなかった主人への召集令状がきて、出征して行きました。満州の冬は零下三十度を下回るほどで、水が衣服につけばすぐに凍ってしまふような厳しい寒さの中、由子をおぶって野良仕事にできました。由子が泣いて私も泣きながら、主人の身の上を案じる毎日でした。

昭和十六年に太平洋戦争が始まると、開拓団にもほ

つばつ召集がくるようになりました。治安上、満州人には知られたくないと内々で出征して行きました。やがて開拓団は老人や子供連れの女ばかりになり、大きな馬や牛を使い切れず、飼育もできないので殺してしまいました。

昭和二十年七月には、満州に駐屯していた関東軍は南方にいったって、職業軍人の家族はすでに日本へ引揚げをしていたということです。満州人や朝鮮人は日本が戦争に負けると知っていました。八月九日にソ連軍が満州国境を突破してきました。私たち開拓者は、日本の国策により、ソ連と満州の国境警備と戦時下の食料増産のため、黒龍江省一帯へ移民させられました。満州の大陸で死亡したり、孤児になったり、戦争によって多くの人々がここに棄てられたのだと思いました。

八月十五日の終戦は、少し後に知りましたが、開拓団の人は本気にはしませんでした。そのうちに、満州人が日本人の家の中の物をすぐに持っていくようになり、次第に治安が悪くなり、殺された人もいました。敗戦とともに、彼らの態度はがらりと変わりました。

そして匪賊の襲撃が始まりました。開拓集落ごとに全員交代で警備につき、匪賊がきそうだと情報が入れば、子供をおぶって野原の大きな草陰や窪地に身を隠し、見張りの人がもう匪賊がいないと連絡をくれるのを待ち、家へ戻るといことが続きました。匪賊の襲撃のたびに、子供の泣き声を静かにさせると叱られたり、老人は「もう死んでもよい」と、家に残る人もいました。集落に戻ると、病人や老人は殺されてはいませんでした。布団や衣類、食糧などはすべて、持ち去られていました。

満州の警察と公安隊が、日本人全員を本部前に集め、身体検査と言っては、男女の別なく衣服を脱がし、その場でよいものを着ていれば脱がして持って行き、反抗すれば即刻銃殺されました。飼っていた馬を取り押さえようとしたら、逃げると思われ、全員の前で銃殺された人もいました。

匪賊の中には銃を持っていない者もあり、刀や槍を持って襲撃してきます。このとき、夏目宗八さんが応戦して槍で突き刺され、大変な傷を負いました。開拓

団の中に元看護婦の方がおられ、手元の救急箱でなんとか傷口を縫い一命をとりました。

この三合屯開拓団も死者や傷ついた人が増え、ここを引き揚げ、近くにある東陽開拓団へ行くことになりました。移動するときの私の持ち物は、子供のねんねこ一枚と自分の少しの着替えの風呂敷包み一つでした。いよいよ出発の日、ある女性が私に、「一人で二人の子を連れて行くのは無理だから、下の子を門の所に置いていく」と言いました。私は大変驚き、死ぬときは親子一緒だからと話しました。子供のそばを離れず歩きました。しかしこのとき、子供を連れて行けば途中で死ぬだろうから満人にくれてやろうと考える人、親が病気で連れて行けない人、満人と結婚する女性などがいました。バラバラな行動がありました。大きな団体となって移動し、東陽開拓団に着きました。学校の校舎を借りてお世話になることができ一安心でした。しかし食べる物はなく、開拓団の人が刈り残した稲を元気な人で刈り取り食べました。十一月の半ば過ぎ、ここでも匪賊が来るようになり、病人の布団をはぎ取

り、何か出せと火の付いた薪で男の人を叩くなど、悪事のし放題でした。取られる物もなく無抵抗でおりますと、そのうちに帰って行きます。「女を出せ」と乱暴されたこともあります。少したったころ、中央軍と共産軍の戦いがあり、共産軍が勝ちました。東陽開拓団にも共産軍が入ってきて、生きた気がしませんでしたが、何と日本語で私たちの行動を指揮してきました。匪賊も来なくなり、少し心にゆとりが持てました。

しかし長い間の大勢での生活で、やはり食べ物は無くなりました。滝川さんという方がいらっしやって、その方は満州人に信頼のある方だったので、満州人の家に仕事の世話をしていただき、そこで働き、食べ物をもたらしておりました。しかし、それはかつての日本人としては恥ずかしい姿でありました。そのうち治安も少しずつよくなり、齊齊哈爾まで戻れることになりました。

一日でも早く日本へ帰りたくて、私は由子をおぶって、二十人あまりの人たちと共に行列を作って、齊齊哈爾へ向かって歩きました。由子をおぶって歩くので

不自由な歩き方をしていると、二人の兵隊の方が助けられました。夜になると、滝川さんが交渉してくれ、満州人の家に泊めてもらいました。作業小屋を借りたり、野宿をしたりして四日間歩き、尾牛屯に着きました。

尾牛屯の満州人たちはいい人たちでした。どうせ難民生活をしていて、いつ帰国できるかわからないなら、寒い齊齊哈爾へ行くより、暖かい春をここで待ってはと言ってくれる人がおりました。そこで皆で分散して満州人の家に置いてもらい、ここで働きながら春を待つことにしました。

ここにいる間、ロシア兵は、日本人を見たら殺すと銃を向けてきました。満州人たちはロシア兵がくると私たちを一緒に仕事場に連れて行き、日本人はいないと言ってくれたこともありました。途中、発疹チフスにもかかったりしましたが、よく看病してもらい治りました。

五月の始めに再び齊齊哈爾へ向かうことが決まりました。私たちは、働いた代金をもらって齊齊哈爾に向

かいました。道中ぼろぼろの着物を着て歩く私たちを見て道端の満州人たちが笑っていました。子供を売れとも言われました。惨めな姿をさらけ出し「戦争に負けたのだ」と実感し、なんとも情けなく、また、腹立たしかったのですが、知らぬ顔をして歩きました。

待ちわびた齊齊哈爾に着き、吉野屋という元旅館に入りました。滝川さんが日本人会へ行き、高粱とおかず代を、わずかでしましたがもらってきました。滝川さんも、家族の待つ平陽に帰って行きましたので、後は自力で働いて引揚げの日を待ちました。朝は豆腐屋で豆腐を売り、昼間は満州人の家で洗濯を一枚五銭でやりました。満州人に知り合いも増え、少しずつお金を稼ぎました。しかし病気で働けない人は医者にも診てもらえず、薬一つあるわけでもなく、痩せ細って寝ているだけで、ただ死を待つばかりでした。

三合屯からきた人の中からも、病気の人が毎日か、あるいは週に二、三人は死んでいくようになりました。死体を埋めに日本人墓地へお手伝いについていきましたが、死体は、浅く、申し訳程度に埋めてあるだけで、

今にも手や足が出てきそうな土盛りの墓が見渡す限りありました。生き地獄とはこのことかと思いました。敗戦後の悲惨な引揚げの中で、家族のことに思いを寄せながら死んでいった人の心境は、いかばかりかと察して、同情の涙が止まりませんでした。私も子供連れなので、もし私が死んだらと、同じ町の出身の人に子供のことを何度も頼んでおきました。

二十一年の九月になって、いよいよ齊齊哈爾にいる人たちの引揚げが始まりました。引揚げていく人たちが持っていた余分な着物などは、後に齊齊哈爾に出てくる人のために置いていきました。日本人の心遣いで、おかげさまで、私のような、ぼろぼろの着物の者も少しはよい着物で帰ることができました。

私たちは十月の初めに帰ることになりました。私の荷物は、子供と二人で食べるものを少し持っただけです。ただただ日本に帰れることが嬉しくて、気にもなりませんでした。

引揚げ当日の朝早く、齊齊哈爾駅に皆集合しました。そこである家族を見て驚きました。昨日までおぼさ

ていた女兒がいません。尋ねると、満州人に連れてきたとのことで、何ともいえない気持ちになりました。

親の気持ちはそれぞれで、このような状況では仕方がないと思いつつも涙があふれて仕方ありませんでした。

三合屯開拓団の人は皆どうなったのでしょうか。中には置き去りになった子供、引揚げ途中で不明になった人、殺された人、病気で死んだ人、主人を召集で取られたままの妻。運よく生き残れた人だけが、それぞれの思いを抱いて最後の別れとなる黒龍江省齊齊哈爾の駅へ集結してきました。未解決な事情を残してこの地を去ることは、心残りが尽きません。

引揚船のぞる壺蘆島まで、また長い旅でした。齊齊哈爾から貨物列車に人をいっぱい詰め込んで、バケツの便器を隅に置いて出発しました。帰れることが嬉しくてだれも苦になりませんでした。何日か過ぎて乗っていた貨車の中で、何人か病気で死にました。途中貨車が止まったとき、死体を野原に置いて、また発車しました。死んだ子をおぶって貨車が止まるのを待っている母親もあり、あまりにも悲惨でした。一週間ほど

過ぎたころ、鉄橋の線路が外してあり、中央軍が逃げるためにしたということで、そこから先は、大勢の人に遅れぬよう歩き続けました。

このようなときに見た光景ですが、三、四歳ぐらいの二人の兄弟が、道端で泣いて助けを求めていましたが、私も由子を助けてもらっている身でどうにもなりません。後で、隊長と役員が二人を連れてきたと知り、自分のことのように嬉しかったものです。そのうちに迎える車がきたので、女の子と子供の周りを男の人に囲ってもらって車に乗り込み、また長い旅が始まりました。何日かたって壺蘆島に着きました。ここの収容所には大勢の人が入っていました。一週間待ち、女の子が急死したので、さらに一週間船に乗るのが延びました。

ようやく待望の引揚船に乗れました。乗船できた感激は一生涯忘れることはできません。このときの配給は乾パン十個、子供には五個。水ばかり多いお粥です。空腹でした。船の中で死んでしまう人も何人かいました。私のような子供連れの方は、何かにつけて人

様の足手まといと言われてきたので、常に気を張っておりました。

やがて待ちに待った祖国の博多の沖に停泊し、嬉し涙を流す者、大きな声を上げる者など、皆気持ちが高ぶっておりました。船の中で死者がでて上陸が一週間延びました。海の上から博多の夜景を見て、本当に帰ってきたのだと思ひながら、故郷の設楽町の実家がどうなっているか、召集で行った主人は生存しているかなど心配事で心はいっぱいでした。船中で入国検査を終え、シラミ取りのDDTを頭から真っ白くなるほどかけられ、船を降りました。

夕刻、博多の宿泊所に行く途中、道端で石塔を二つ並べて鍋で何か煮ている人を見ました。幸島さんが「おい、これを見よ。これが日本の負けた姿だ」と言いました。宿泊所でいただいたおにぎりのおいしかったことは今でも忘れていません。

博多から名古屋へ向かう汽車の中で、大はしゃぎの人もおりましたが、私は主人の安否がやはり気がかりでした。二日目に名古屋に着き、そこで一泊して名古屋

屋の町を見て驚きました。町の形はなく、焼け野原で、私の想像をはるかに越えるものでした。

その日のうちに私の実家へ戻りました。故郷の山河はただただ懐かしく、実家の戸を開け帰国の挨拶をしたときは、泣けて泣けて何を言ったのか、今も思い出せません。兄から、主人が無事帰っていることを聞き、本当によかったと安心しました。翌日、主人の実家へ向かいました。家族も皆元気でおりました。

やっと家族で暮らせる日がきましたが、今後の職業をどうするか、親戚の人にも力になっていただき相談をしました。主人の父が知り合いの人から空き家を借りてくれて、そこに住むことになり、はじめて、身も心も平和な新婚生活に戻ることができました。しかし、山の中で時折鉄砲の音がすると、由子が匪賊が来たと言き出し、幼い子供心の傷は長く尾を引いていました。

引揚者に何の貯えもあるはずがなく、親戚、知人に仕事を頼んで生活をしていかなければなりません。このままでは恥ずかしいと思いつつ、その一方では、国のために、戦争のためにこうなったのだから、乞食同

然で帰国してきても恥じるべきでない、自分に言い聞かせてきました。主人は日雇いをして生活を支えてくれましたが、親戚にも迷惑をかけてしまし、実家にも戻るわけにもいきません。惨めさを感じるようになってきて、よその土地へ行って生活をしたいと考えようになりました。

昭和二十二年、東三河の満州からの引揚者二十九人の人たちと共に、愛知県庁に、北設楽郡設楽町段戸の山に、開拓者として入植したいと申請をしました。名古屋営林局の土地であったため、農地解放される事は難しく、田峯村の計らいで裏谷分校の二教室と物置を借りて共同宿舎とし、開拓への入植準備をしながら待ちました。

昭和二十三年に国有地が払い下げられて、県の開拓事業として発足しました。一戸分の配分は、約二十七ヘクタールでした。満州の苦しみを思えば何でもないかと張り切り、主人と開拓の鍬を振りましました。匪賊はでないし殺されることもない。貧乏も恥ずかしくない。普通でしたらこんな山奥に進んで暮らす人はいないで

しょうが、ここは親子三人にとっては安住の地でした。何年か後に、道路工事や個人宅地の造成を共同作業で行い、山の木を切り、我が家も丸太作りで建てることできました。ランプでの生活ではありませんが。

開墾作業中の現金収入がないうちは、山の木を切り売りして生活費にあてました。苦しい開拓が続くなか、だんだんそこを離れる人が増え、残ったのは三人だけでした。

五十年がたち、大きな道路も整備され、観光でこの高原へ訪れる人も増えました。

三人の子供も生長し、孫もおります。苦勞を共にした主人に、これからというときに先立たれ、私は今、山の中で一人静かな生活を楽しんでいます。八十歳までも生きられ、感謝の気持ちで暮らしています。

満州開拓団の大陸で亡くなっていった人たちのことを思い、もう二度と、どんなことがあっても戦争はしてはいけな思っております。そして後世に、このような残酷で悲惨なことが決して起こらぬよう、よく知っていただきたいのです。

平成七年秋に、新城市桜渕公園に拓魂碑が建ち、敬虔な気持ちをもって慰霊してきました。

ときどき、夕暮れどきに満州の思い出にふけることがあります。そんなとき、子供や夏目さんが訪ねてきてくれます。